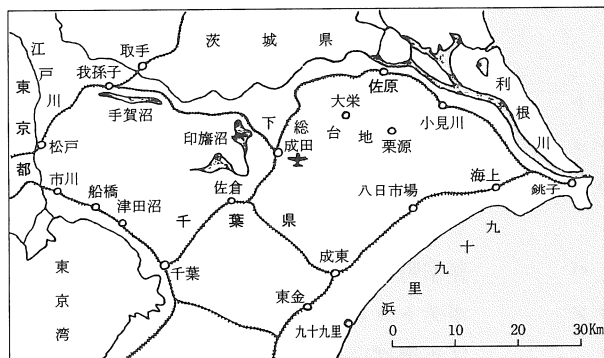


日本地図とさつまいものまち

—北総の小江戸、佐原を訪ねて—

いも類振興情報編集部



やみません。この園内もまた、女性の船頭さんが漕ぐ舟で水路をめぐり、鑑賞できるようにつくられています。水生植物のほか、ウメ・スイセン・サクラソウ・フジ・ハギなどの草花、花木も植えられ、遠来の観光客ばかりでなく、市民にとっても楽しい憩いの場所となっています。

市にはまた、県立の大利根博物館があり、利根川の流れが現在の姿になる以前

1. 大利根の豊かな恵み

アヤメ、ハスなど水生植物の花を、水路を巡る舟から鑑賞できる水郷、鹿島神宮とならぶ由緒ある香取神宮は、千葉県佐原市にあります。坂東太郎の別名をもつ利根川は、下流で入り組んだ水路、湖沼をかたち作りますが、千葉・茨城両県にまたがるこの地は古くから水運が発達し、佐原はその中心の商業都市として栄えました。

市は千葉県の北部に位置し、利根川に接する低地から南の下総台地にひろがり、昭和26年（1951）佐原町と近隣の香取町・香西町・東大戸町が合併して市制が施行され、さらに昭和30年2月に4町村を編入して今日に至っています。女性船頭の操る舟にゆられながら風情を味わう有名な加藤洲十二橋の近くに、昭和44年市立水生植物園が開園し、ハナショウブ400種150万株のほか、アヤメ・カキツバタ・ハナバス・スイレンなどが4月末から9月まで美しく咲き、その規模の大きさと、息を呑むような美観は多くの観光客を魅了して

の東下総地域の歴史が、古い地質時代より縄文・弥生・古墳各時代を経て中世に至るまで解説され、さらに今の流れとなった近世以降の利根川と、その水系を舞台として栄えた文化に焦点をあて、水と川との関わりについて紹介し、利根川での漁法、用いられた漁具、水運の状況、河岸のにぎわいのありさまのほか、この地方で行われた稲作についても展示されています。

香取神宮は市の東にあり、^{ふつぬしのおおかみ}経津主大神が祀られています。この大神は鹿島の大神とともに出雲の大國主命と話し合いをもたれ、円



▲佐原の市街

満裡に国土を皇孫に捧げ、そのうえ国内各地で暴れ廻っていた神々を平定して日本建国の基をつくられ、また東国開拓の大業を成し遂げられました。明治以後の神社制度では官幣大社に位置づけられ、毎天天皇陛下の御幣帛（神に捧げる絹）の供進があり、6年毎に勅使が参向される勅祭社に指定されています。一般には国運開発の神、武道の神、交通安全の神、民業（農業・商工業）の神、海上守護の神、として全国的にあつく信仰され、バスでの団体その他参拝者がひきもぎらず、老杉がうっそうと茂る中に鎮座する本殿は、元禄13年（1700）将軍徳川綱吉の造営になるもので、昭和52年（1977）重要文化財に指定されています。

2. 水運の発達と江戸文化人の往来

古く鎌倉時代には千葉氏の一族がこの地に勢力を伸ばしましたが、のち国分氏が力を振るい、天正12年（1584）頃には国分大膳がここにある岩ヶ崎に新たに城を築いて移ったといわれます。以前からこの周辺地域では稲作を中心とする農業生産が盛んで、中世以降流通経済が発達しましたが、国分氏支配の時代から市が開かれ、近世には年貢米・酒・しょう油・薪などが利根川の水運によって近隣地区および江戸に運送され、佐原河岸がその中



▲佐原の市街

心となりました。国分氏が没落したのち、佐原に帰農した伊能氏、永沢氏などは村名主を兼ねる一方で酒・しょう油など醸造業を営み、この地の代表的な産業に育て上げました。

天正18年に徳川家康が関東入りしたのに伴い、この地域は代官吉田佐太郎の支配下に入ります。近辺の水面では鮭漁、鯉漁が行われ、慶長10年（1605）矢作領内利根川の鮭が「御菜魚」として将軍に献上され、これによって利根川の鮭の漁業権が与えられますが、のちに物納から運上金上納にかわっています。鯉はともかく、北の海で育つ鮭がこの辺りで獲れていたことは現在では思いもおよばないことですが、これら魚の地曳網漁は大正期までみられたといえます。

舟着き場から積み出された産物のうち、江戸向けのほとんどは年貢米で、佐原の酒の多くは近隣向けでした。一方、江戸からは綿製品、ろうそく、切りこんぶ、その他各種の手工業製品などが運ばれてきています。

近世に入り、佐原経済の隆盛と利根川水運の発展にともない、江戸との交流がもたれるに及んで、この文化に接する機会が多くなり、とくに江戸の文人墨客が相次いでこの地に來遊するようになって、大きな文化的刺激を受けるようになりました。松尾芭蕉、橘千蔭、小林一茶、十返舎一九、渡辺華山、山縣大武、などの有名人がこの地に遊んだといわれますが、これによってこの地から著名な学者が輩出するきっかけがつけられ、その代表として伊能忠敬があげられます。

3. 家業再興につづいて勉学

現在の日本地図が作製される土台となった「伊能図」とよばれる「大日本沿海輿地全図」（輿地＝大地の意）は忠敬が17年を費して全

国の沿岸を測量した成果です。平成10年（1998）、忠敬の没後180年を記念して市内にある旧宅の傍わに新たに記念館が竣工し、公開されました。記念館には、佐原で家業に励んだ時代、隠居をしたのち勉学して全国測量に歩んだ時代にかかわる展示と、完成した伊能図、それに測量に用いた器具などが展示されています。

延享^{えんきやう}2年（1745）上総国山辺郡小関村（現千葉県山武郡九十九里町小関）に生をうけた忠敬は幼名を神保三治郎といい、宝暦12年（1762）17歳で下総国香取郡佐原村の伊能家の養子となりましたが、村民に推されて名主後見となり、この年に名を忠敬と改めています。忠敬は才覚にあふれ、家業であった酒・しょう油などの醸造業に励むほか、江戸に新問屋を開き、また数度にわたっておこった関東地区の大凶作の折には関西からコメを買入れて近隣に安く売り、残りを江戸に回送するなどして収入を増やすよう努力し、衰えかけていた家運に以前のような繁栄をもたらしました。村を治めた功が認められ、名主、村役後見などの公務を仰せつかり、苗字帯刀を許されますが、寛政6年（1794）49歳のとき家を長男景敬に譲り、隠居をして通称勘解由^{かげゆ}と名乗っています。

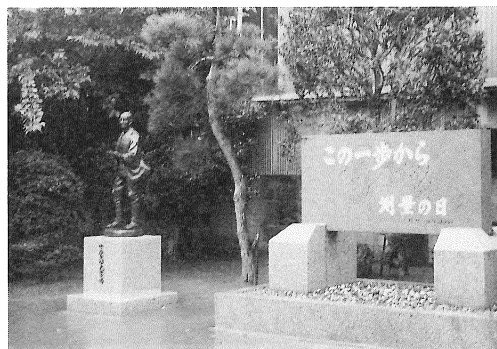


▲伊能忠敬旧居

家業に励むかたわら、向学心に燃える忠敬は文学、歴史、医学、数学、測量術、天文暦学など、幅広い文野の書を学びましたが、とくに測量、天文への関心は高く、隠居の翌年には江戸深川黒江町に住み、家に施設を整えて天体観測をはじめ、その翌年幕府天文方高橋^{よしたき}至時の門下となり、ここで天文暦学を修め測量術に精進するようになります。

4. 測量への旅

これより前、寛政5年（1793）48歳のとき関西に旅し、佐原から江戸、駿府、伊勢、吉野、大坂を経て坂越に達し、ここで引き返し、京都から中仙道經由で江戸に戻っていますが、この頃は実測による地図がまだなく、ために忠敬に、正しい地区を作ろうとの意欲を一層かきたてさせたに違いありません。忠敬は恩師至時のすすめによって蝦夷地（北海道）の測量を幕府に申し出て許され、寛政12年55歳のとき自費で蝦夷地南東海岸の測量を行い、地図を作製して幕府に提出しています。このち江戸から蝦夷地に至る海岸と、西蝦夷地の測量を計画したのですが、測量器械などを運ぶ人馬が調達できなかったため許可が得られず、かわりに本州東海岸の測量を願い出、3年にわたって太平洋岸は尾張（愛知県）、日本海岸は越前（福井県）から東の海岸と、



▲伊能忠敬の銅像と碑

東海道・中仙道などの街道を測量し、文化元年（1804）本州東半部の地図を作製しています。この間不幸にも師至時の死に遭いますが、忠敬はその実力を認められ幕府に登用され、西国測量の命を受け、文化2年から同13年に至る間、中国・四国・九州の沿岸、伊豆七島、それに江戸内の細かい測量を行い、それぞれの実測図を作製しています。

17年にわたった測量を終えた忠敬は、各地方の地図を総合して「大日本沿岸輿地全図」の作製にとりかかりましたが、惜しいことに文政元年（1818）志半ばにして江戸八丁堀の自宅で、73歳で逝去しました。しかし高橋景保の監督のもと、その作業は引き継がれて文政4年に全図の完成をみています。

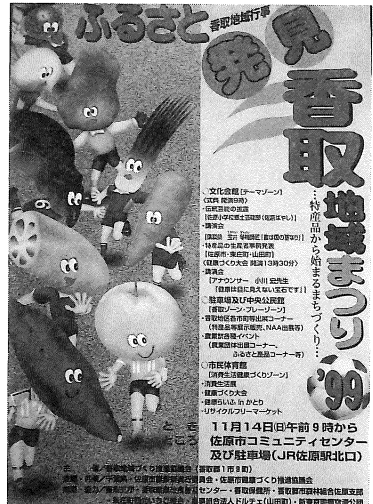
5. 驚嘆すべき正確さ

現在と比べると、まことに簡単な器具を用いての測量でしたが、精密な地図を作り上げることができたのは忠敬の知識、熱意と、それを支えた人々の惜しみない努力によるのもちろんであり、それに技術的な見地からは天体観測によって観測地を地球上に位置づけたから、といわれています。

記念館の入口には、ランドサット衛星による日本地図と、大日本沿海輿地全図を重ねて展示していますが、多少の経度のズレが、とくに北海道で見られるものの、その形、大きさ、緯度がほとんど現在の地図と変りなく、ほぼ正確に示されているのは全く驚きで、乏しい器具・資材でよくこれだけの偉業を成し遂げたものと、忠敬の測量術、天文知識の豊かさ、熱意、根気とに深く畏敬の念を払うものであります。

「伊能図」をめぐる、いろいろな出来事もありました。正確な地図は当然幕府にとっ

て海防上重要なもので、外国に向けては非公開としていましたが、文政11年（1828）ドイツ人医師シーボルトが高橋景保から入手した地図のほか、



▲香取地域まつりのポスター

多くの国禁の図書を持ち出そうとしたことが発覚しました。発覚直前シーボルトは、これらが押収されることを予知して徹夜で地図を写してバタビア（現インドネシア、ジャカルタ）へ送ったといわれます。のちにこの写しは海外に紹介され、日本の正確な姿を伝えていきます。文久元年（1861）には、江戸条約に基づく英国の測量艦が来日しましたが、忠敬の実測図が艦長たちの目にとまり、あまりにも正確であることに感嘆して測量を中止しています。

もし忠敬が、私財を投じて地図作製に取り組まなかったならば、どうであっただいしょうか。幕末の頃アジア各地の経略をはかった欧州各国の手は当然わが国にも伸びて、これら国々によって測量が行われたかもしれません。それが延いては、わが国と欧州諸国との間に、現在とはまた異った関係をもたらしただいかもしれません。

明治に入り、同13年内務省で伊能図に基づき大日本図全図が作製され、同17年陸軍参謀本部で、やはり伊能図を主体として全国的地

図として20万分の1図の編集がはじめられ、その後作られた5万分の1、2万5千分の1図は、国防に用いらただけでなく、広く公開されて登山・ハイキングなど民間の行楽に用いられ、親しまれてきました。

伊能忠敬についてやや多くを記しましたが、200年近くも前に正確な地図を作製した忠敬は、ただ佐原市ばかりでなく、日本が生んだ誇るべき偉人であり、地元ほか各地に銅像・記念碑が建立され、また明治の末頃からは小学校の修身教科書に載せられるようになったのも、まことに宜なる哉であり、佐原を語るとき忘れることのできない感慨深い史実であります。

6. さつまいもが畑作を支える

佐原市街の中央を南から北に流れる小野川のほとり、また街の東西を走る目貫き通りの両側には土蔵造り、また瓦屋根木造の商家が建ち並び、古くから交易、流通で栄えた町の面影をただよわせ、散策すると江戸の昔に引き戻された感じがします。しかし商業、運送業の発展をもたらしたのは、この地が豊かな農産物で潤っていたためであることを、見逃すことはできません。

佐原市の総面積は120km²、うち耕地は5,800haで、耕地の比率は48%と、ほぼ半分が農地となっています。利根川に沿った低地には水田がひらけ、南部の下総台地は畑作地帯となっていますが、内訳は水田が4,370haで約3/4を占め、残りの1,430haが畑地です（平成9年調）。昔からコメどころで年貢米として多くを江戸に輸送していたこの地は、現在県下でも市原市に次ぐ米作地帯、とくに早場米の産地として知られ、生産量ばかりでなく品質のよいことでも高い評価を得ています。

畑作での作物別作付面積の内訳をみますと（平成9年調）、ダイコン・ニンジン・ゴボウ・サトイモなどの根菜類が156ha（以下同）、葉菜類39、果菜23、じゃがいも15、豆類42、工芸作物4、メロン・スイカなど果実の野菜3、洋菜9、その他43、以上の計が334ですが、さつまいもは868で、実に畑作の3/5を占める一大産地となっています。



▲佐原のいも菓子

さつまいもが佐原市の農作物のなかで、どれほど重要であるかは、作付面積のほか個々の農産物についての粗生産額をみてもわかりますが、多い順に述べますとコメ6,082（百万円、以下同）、さつまいも3,290、ブタ1,230、ナシ330、ゴボウ192、ブロイラー168、鶏卵167、生乳146、ダイコン144、人参129、となっており、さつまいもはコメに次いでいますが、生産額では3位以下を大きく引き離しています。なお佐原市のさつまいもの生産額は県全体の約13%を占めています。

さつまいもの作付型にはいろいろありますが、ほとんどはマルチ栽培です。植付は4月下旬から6月にわたりますが、中心は5月植えであり、品種はほとんどがベニアズマで、隣の栗源町で多くつくられるベニコマチはなく、また昔広くつくられ、今では愛好家の郷愁をそそる^{たいはく}大白などの在来品種ありません。

掘取りは8月頃からはじめられ、最盛期は11月であって、この頃には佐原市を含む近隣地域の農産物に親しんでもらい、消費をひろめるための盛大な農業イベントが毎年計画されています。さつまいもは、ほとんどが青果用として主に東京市場その他関東地域に出荷され、好評を得ていますが、さらにこの地のさつまいもへの理解と認識を高める消費活動として、東京・横浜などで焼きいもを市民に配付する、などのイベントも行われています。

7. 昔から暮らしの中にとけこんで

さつまいもは、江戸時代から明治大正期、また戦前戦中期をとおして、庶民とくに農家の日々の暮らしにはなくてはならない食物でした。

この地方の農村の秋は、イネ刈り、さつまいも、さといも、らっかせいの掘取りなどの

収穫作業と、ムギ、春野菜の種まきどきで、年間でもっとも忙しいときですが、このときさつまいもはふかしたり焼いたりして、主に間食として珍重されました。さといもは煮物、茹でものまたは汁の実など、食事のときの副食として用いられることが多かったのですが、さつまいもも、煮物、てんぷらなどにしてごはんのおかずにもされることも多かったようです。いずれにしても現在のように手をかけ、料理に工夫をこらすようなことはなく、素材そのままの姿で味わわれています。

夏秋作物の植付をする春もまた忙しい時期ですが、やわらかい陽ざしを浴びて励む農作業の一服どきにいただくおやつもまた楽しいものでした。さといもの多くは収穫後貯蔵され、値上がりする春に取り出されますが、売りに出せない格外品は茹でておやつに供されました。さつまいももこの時期まで貯えられ、ふかして間食に供されます。昔は一軒の農家が数品種を植付けていましたが、面白いことに女性は肉が白くてねっとり甘いものを好み、男性は黄色のほくほくとしたものを、より好んだといわれます。白い種類には「おいらん」「大白」などがあって、戦後しばらくまで作られましたが、いまではほとんど姿を見ることはなく、昔からのさつまいも愛好者に惜しまれています。

じゃがいもは収穫されるのが6、7月頃で、さつまいも、さといもに比べると作付面積も収穫量も少なく、農家では7月から10月までの間、煮物、汁物として多く用いられた、とあります。

昭和40年（1965）頃から経済発展につれて畜産物、果物、高級野菜などの消費が次第に増え、それに反しても類ばかりでなく、コ

メの消費も減ってゆきますが、さつまいもも、ふかしておやつにするなどの、昔からの消費形態が少なくなり、生産農家でさえも自家用として食べる量が減ってきています。

消費を増やすための工夫は、全国の主な産地で真剣に取り組まれています。ふだんの副食としていろいろと創意がこらされてはいるものの、甘いために限界があり、やはり焼いもとして間食にするほか、デザートとして、あるいは菓子として消費をはかろう、との動きが活発です。埼玉県川越市、鹿児島県などはいも菓子の先進地ですが、ここ佐原でも特産のさつまいもを活かした、珍しい菓子がつくられています。

8. 金賞にかがやく

古きよき時代の繁栄をしのばせる街には、各所にお菓子屋さんがあって、それぞれの工夫をこらしたデザインと味とを競い合っています。

いもようかんには黄色のものと紫色とがあり、きちんと包装されて日持ちするものが多く、まんじゅうには普通のものと酒まんじゅうとがあり、スイートポテト風焼菓子はさつまいもにバターなどを加えて練り上げたものを土台としていますが、焼いもの皮を敷いたもの、切ったさつまいもを上のにのせたもの、シナモンで風味をつけたもの、など、店によって趣向をこらしています。ほかに、いもきんつば、どらやき、ドーナツ、大福、焼きいもパイ、いもせんべい、などが目につきましたが、これらの中には全国さつまいも菓子コンクールで見事金賞の誉を得たものもありました。どのお菓子もみな、さつまいもが原料であることがよくわかり、新しい感覚でつくられていて、しかもつくった人たちの肌の温も

りが伝わってくるような素朴さも備えています。原料はすべて地元でつくられたさつまいもを用いている、とのことでした。

いまのところ、ほとんどが市内で販売され、大都市への進出はみられないようですが、この地を訪れる観光客はきっと他の名産品、たとえば地酒、川魚のすずめ焼、民芸品などとともに、おみやげとして持ち帰りたくなるでしょう。

気ぜわしい、造られた世界から一転、江戸時代へタイムスリップしたような一日でしたが、あらためて日本史をひもといた思いとともに、心温まる人々の対応、数々の新たな発見、などに接し、また訪れてみたいと名残りを惜しみながら、小雨に煙る佐原の町をあとにしました。

編集 後記

入り日の名残りをとどめる、ほのかに赤い西の空を背に、小高い丘に建つ古城はくっきりとその重厚なシルエットを描き出し、川面の舟は流れにさからうことなく、静かに左へ右へとゆられています。さっと生温かい夜風が吹き抜け、三三五五車座になった観客の肩の上に、はらはらと花びらが散りかかりました。今宵もまた、桜堤では去りゆく花の季節を惜しむ人たちで、平和な華やかなうたげがひろげられています。

いも類振興情報 第63号

平成12年4月15日発行

発行所 財団法人 いも類振興会
東京都港区赤坂6-10-41
ヴィップ赤坂303号室
電話 03-3588-1040
FAX 03-3588-1225
振替 00130-1-110152
印刷所 JTB印刷株式会社